

# 生きる

あんどう・まきこ 48年函館市生まれ。66年、函館中部高卒。夫の転勤で78年から石狩市花川に住む。植物画には90年から取り組み、93年には国立科学博物館主催のコンクールで応募作「ヤマゴボウ」で文部大臣賞を受賞した。文化教室で講師を務める。札幌や東京で開催した個展は昨年で24回を数える。日本植物画倶楽部、北海道植物画協会会員。

石狩の花であるハマナスは細長いつぼみの中に大輪のローズピンクの花弁がしまわれている。「だから開花直後は花弁がまだしわしわ。時とともにそのしわがなくなっていく。人間と逆ですね」とほほ笑む。そうした時間経過を水彩絵の具で緻密に表現し、美しさと同時に花固有の特徴を正確に伝える安藤さんの

## 作品で奉仕活動が続ける植物画家

## 安藤 牧子さん(65)



「見て知り、知って見よ」（見てから知れない、知ってから見てはいけない）。思想家柳宗悦の一節が「好きな言葉」と話す安藤さん

# カレンダーで被災地支援

植物画は道内外に熱心なファンがいる。函館生まれで、幼いころは青函連絡船で働いていた父が出張先から送ってくるスケッチ付きの絵はがきが楽しみだった。高校では化学が好きな「理系女子」。「物質を組み合わせたらどんな反応をするのか、それはなぜなのか。仕組みを知りたいが性格が植物画に向いていたのかもしれない」と話す。高校卒業後、銀行員時代知り合った建築士の夫と結婚し、石狩に家を構えて35年になる。家の前には公園があり、「防風林を歩いて四季の草花を楽しんでいる」という。植物画の世界を知ったのは長男が高校に入った1990年。札幌で見た展覧会がきっかけ。「植物に教わる」とおりに描けばできるか

「も」と、植物画の絵画教室に通い基本を学んだ。2003年から制作・販売を続けているカレンダーは全て描きおろし。昨年は毎年使える万年カレンダーも作った。家族の介護や自身の闘病に疲れた人から「安藤さんの絵が元気をくれた」と書かれた手紙やファクスが送られてくる。11年、東日本大震災が起きてすぐ、「明日が来るこ

とを実感してもらえたら」と宮城県名取市の知人やネット上で知った岩手県陸前高田市の病院にカレンダーを送った。さらに、植物画をプリントしたクリアファイル5千枚の売り上げの一部40万円を日本赤十字社やあしなが育英会に託した。ファイルの販売によるあしなが育英会の支援は、現在も続けている。

昨年は念願の画集「花物語」（共同文化社）を出版した。「いつも見守ってくれる主人や息子たち、全国から応援してくださる皆さんのおかげ」と語る。

取材中、陸前高田の病院事務長から14年度版のカレンダーが届いたお礼の電話がかかってきた。「植物画を通してできた、前から知っていた友達のように」といい、互いの健康を気遣った。画集や万年カレンダー、クリアファイルは札幌市内の大丸藤井セントラル、コーチャンフォーで扱っている。安藤さん自身も受け付けている(☎01333・74・6128)。

文・佐藤 優子

(フリーライター)

写真・飛田 信彦

(フリーカメラマン)